

「心豊かな活力とうるおいのある住みよいまち・可児」を!

心がなごみ いのち 生命の大切さを育むとき



至福の ひととき

思・い・や・り・の・め・ざ・め



目次

- 迎春のかがやき ①
 - 「躍動の設立20周年へ」——本センター会長 杉山 桂
- 特集「人権文化の光彩」 ②～③
 - 平成22年度(第9回)人権啓発入賞「標語・300字小説」
 - 〈解説〉・**応募者総数** : 1,521人(小学生982人・中高一般539人)
 - ・〈最多応募校〉・広見小学校(130点) ・中部中学校(226点) ・入賞作品 標語30点 300字小説7点
- コーナー ④
 - 壁の箴言(あなたは知っていますか?)—故郷を思う「望郷の念」とは/母との本能的な回帰では—。
 - 可児ぬくもりネットだより「心の響き」
 - 人権まんが「ぬくもり・まゆちゃん⑤」(あなたが生まれた時まわりの人も幸せ) 他

迎春のかがやき

躍動の設立20周年へ

本センター会長 杉山 桂

新春を迎え、多くの思いを抱いて出発されたことと思います。

世相の流れが、急に2つに分かれてしまった感じがします。それは、人権を大事に生きる人とそうでない人の格差が大きくなっていることです。これは社会の多くが不透明感に溢れ、希望が見出せないでいるからだと思います。

こうした時こそ、より一層私どもの活動が、大事だと思

っております。

本センターは、今年で20周年を迎えることとなりました。これも偏に多くの行事を通して、皆様と共に歩ませていただいた賜ものと心よりお礼申し上げます。

本年も躍動感の溢れる本センターとなるよう、皆様のご協力よろしく申し上げます。

・人権啓発入賞(標語)

【最優秀賞】

勇気だし そつとさしだす

救いの手

近藤有香(小学校六年生)

【優秀賞】

一人だけ かかえこまずに

まずそうだん

菊池理子(小学校四年生)

消しこむで 消えない一言

その重さ

平野成美(小学校六年生)

考えよう 言っていること

悪いこと

中川大地(小学校六年生)

だめだよと 一言いえる

その勇気

八木美咲(中学校三年生)

あたたかい 家庭がきずく

思いやり

溝口雅弘(小学校六年生)

【入選】

「やめよう」のその一言が すくいの手

寛 里奈(小学校六年生)

思いやる 少しの勇気が いじめをなくす

市原彪斗(小学校六年生)

人はみな 生きられないよ 一人では

西園ひかり(小学校六年生)

あいさつで 心つながる 朝一番

山平 空(小学校六年生)

考えて その子の気持ち 自分の気持ち

稲森 萌(小学校六年生)

さしのべる 一つの勇気が 絆生む

溝口暁久(小学校六年生)

弱いのは いじめるあなたの その心

朽洞有希(中学校三年生)

『いめんね』は 心の扉を 開く鍵

吉田遥貴(中学校二年生)

ひとりでは 生きられないから みんないる

松原璃久(中学校二年生)

あいさつは 心と心の 通信機

松本 萌(小学校六年生)

声かけて やさしい心 ふくらんだ

栗谷本土温(小学校六年生)

かんがえて あいてのきもち もついちど

田口裕斗(小学校六年生)

やさしさは 一人一人の 思いやり

荻谷佳都(小学校六年生)

どの人も 命の重さ みんな同じ

田中菜央子(小学校六年生)

受けてうれしい思いやり

次はあなたが 分ける番

小栗 優(小学校六年生)

考えて! いじめをさるる かなしみを

可児日菜子(小学校六年生)

思いやり それは見えない 心のわ(輪・話)

長瀬真侑(中学校二年生)

大切に 強い心と その勇気

大橋あけ葉(中学校一年生)

よく聴いて 心のさけび 聴き取ろう

加知隼弥(中学校一年生)

笑顔には 幸せ運ぶ 力あり

山中香音(小学校六年生)

思いやり あげた心に 花がさく

小池周平(小学校六年生)

「大丈夫？」 みんなもってる やさしい心

後藤凌七(小学校六年生)

うわさばなし そこでストップ ぼく・わたし

田中美波(中学校三年生)

聞きたいです いじめや差別 なぜするの?

小平遥貴(小学校六年生)



行事報告 人権週間 (H22 12/4~12/10)

岐阜県人権
フェスタ出展

12/11



県民文化ホール「未来会館」
(対話数:約150名)

啓発活動

(街頭啓発)

(出発式・人権展)

12/6



大型店舗(6ヶ所)
(対話数:約1,000名)

12/6



市役所ロビー
富田市長先頭に
(鑑賞者:150名)

ぬくもり講演会

12/4



講師:濱宮郷詞氏
アールにて
(参加者:295名)

ケーブルテレビ可児
(人権週間について)

9/24



(録画風景)
本センター
木村明美さん出演

● 人権啓発入賞

【300字小説】

126作品
より選考

【最優秀賞】

長谷川千穂(中学校三年生)

凜の両親は中国人だ。今日も凜の家の庭に大量のごみがなげ込まれていた。黙って片付ける母を見ながら、凜は、日本人なんか一生許せないだろうと思った。

そして高校の入学式。凜が誰とも話さずに帰ろうとした時、一人の女の子が凜に話しかけた。日本人なんてもつりごりだと思っていた凜は無視をした。二ヶ月たっても彼女は凜に話しかけ続けた。凜は不思議に思っただけに聞いた。「なんで私なんか話しかけるの？私、中国人だよ？」

『凜』っていう子と仲良くなりたい。国なんか関係ないよ。平等に楽しんでいいんだから。」

その時、初めて日本人を少し好きになった。

【優秀賞】

林 奈々子(小学校六年生)

私の学年には耳の聞こえない女の子がいる。今年はその少女となりの席になった。先生の話を通訳していくうちに仲が良くなった。

「こんな私と友達になってくれてありがとう。」

少女は言った。私は

「こんな私じゃないよ。ふつうの女の子だよ。」とはげました。私は手話を勉強した。少女のためのできる事は何か。少女は音を知らない。私は音を伝えてあげればいい。手話を覚えた私は動物の鳴き声などを手話で伝えた。しかし少女は転校してしまう。

「私に音をくれてありがとう。」

「私も人の役に立てて自信がついたよ。」

私の一つの思いと行動が二人の道を変えた。

【優秀賞】

水谷文香(中学校三年生)

その男性は私達のいる車両に乗ってきた。彼が入ってきた瞬間、車両内はザワツいた。思わず私も見入ってしまった。彼は右腕がなく車いすに乗っていた。それから車両内の人達は誰も口を開かず、見て見ぬふりのピシッとした空気が重かった。その時私の息子が

「ママ、あの人がひとつ手ないよ」

「ごらっ」

「いいんですよ」

完全に彼の耳に入っていた。周りの人も細い目で見ていた。

「すいませんっ」

「大丈夫です。気にしないで下さい」

彼の声はとても穏やかで、本当に何も気にしていない様だった。その後

「では」

と私達に声をかけ、息子に左手を振って堂々と車両から車いすで降りていった姿は、両腕のある私達よりも強さのある人間らしい姿だと思った。

【入選】

酒向里奈(中学校二年生)

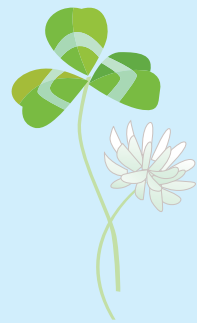
中学校一年、僕はいじめにあっていた。男子には暴力をふるわれ悪口を言われ、女子にはいつも無視された。ある日、進路希望の紙が配られた。どうせ僕はろくな大人にならないだろうと思いき、くしゃくしゃにして引き出しに入れた。

中学二年生になった。また今年もいじめめられると思い、ゆううつだった。だが僕へのいじめを見た担任の行動に驚いた。

「やめなやか。お前達。」

とどなり、それがキッカケでいじめはなくなるといじめは誰かが助け、なくすることができる

学んだ。僕も誰かを助けたいと思った。急いで家に帰り、一年のころのくしゃくしゃの進路希望の紙を開けて「先生」と書いた。



【入選】

永井芹奈(中学校二年生)

体育大会の練習が始まった。私が練習にはやく行こう。」

「と言つと、友達は

「何でそんなに頑張るの。」

と言った。

「なんでって言われても…。」

私は返事に困った。頑張る事が当たり前だと思っていたからだ。年に一回の体育大会。年に一回ぐらい頑張ってもいいじゃないか。団の人に迷惑をかけないように頑張るんじゃないのか。それって普通じゃないのか。逆に聞いてみたかった。

「なぜ頑張らないの。」

きつと友達は

「面倒くさいから。」

と言っただろう。たった一ヶ月の事なのに…。楽しい行事なのに…。こう思っているのは私だけなのだろうか。いや、きつと他にもいるだろう。そして面倒くさいと思っている人も…。私(学級委員)に出来る事は何だろう。

【入選】

武藤千果(中学校一年生)

雨上がりの午後、友人の佐藤さんと学校から帰る途中、歩道橋の下で重そうな荷物を持ったおばあさんが階段の手前で上がるうか迷っているようだった。おばあさんは意を決した様に荷

物を持って階段をとて辛そうに上っていた。佐藤さんは、

「おばあさん…」

と言った。私も心の中では考えていることは同じだと思った。けれども、私たちはただ足を止めて見ているだけであつた。

と、その時一人の男子中学生がおばあさんに駆け寄り一声かけて荷物を持った。それはいつも一人にいる山田くんだった。私はなんだかとてもうれしくなり山田くんをきかけようときれいな夕日を見ながら思った。

【入選】

小島絵梨香(中学校二年生)

青く澄んだ空。私は身震いした。

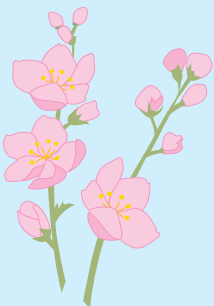
今日は中学校の卒業式だ。私はまだ二年生だが、大好きな先輩が卒業する。

一年生の時、吹奏楽部に入部した。私は部活に入ってから友達ができなかった。優しくしてくれたのは同じパートの先輩だけだった。友達がいけないことを思い切つてうちあげた。先輩に言うのは怖かった。でも先輩は、

「待っているだけではだめ。自分から声をかける勇気が大事だよ。」

と言った。「勇気」をもつことができなかった私を後押ししてくれたのだ。

それから私には沢山の友達ができた。きつと、先輩がいなくても頑張れる。空を見ると雪が降っていた。でも私の心は温かかった。



複写禁止

壁の箴言

「あなたは、知っていますか？」

故郷を思ふ「望郷の念」とは

母との本能的な回帰では！。

お正月には、多くの人が、帰郷されます。それは、母がいるからです。父と家族・友がいるからです。回帰できる安堵の所だからです。また、出生の思い出の詰まった懐かしいところだからです。

故郷には、不思議な力があります。

あの、有名な映画「風と共に去りぬ」の主人公スカーレット・オハラが、激しい半生の全てに破れ絶望の中から、やがて明日への希望を託し一歩を踏み出す「そつだ私が一番愛しているのは、やはり母がいる故郷である。故郷タラに帰ってすべてをやり直そう」と叫ぶシーンを思い出します。故郷には、出発力が潜んでいます。

また一方、作詞家の高野辰之（長野県・中野市）が詠った、あの童謡「ふるさと」の中にも「志を果たして、いつの日にか帰らん」とあります。偉人となることなく、大きく立派な大人になったことを母に見てもらい安心させたいとの心である。この歌の碑は、高野記念館近くの橋の欄干にある。歌は、岡野貞（鳥取市）が作曲した。

人の出発は、母からであり、出産の大変さを母子共に脳裏の奥深くに刻まれている。だからこそ望郷の念は、「本能的にほのかな匂いのある故郷に向かいたくなる回帰」かも知れない。

（編者）

ぬくもりまゆちゃん⑥

〈あなたが生まれた時まわりの人も幸せ〉

作：多・ス／画：miho



心の響き

（本センターホームページ）

可児ぬくもりネット だより

（今週のビタミンから）

決意は、

臨場感の強さが大事！

今週のビタミン

投稿日：2010年4月12日
2010年11月23日編

新しい年度が始まった。決意の時である。

人は、未来に決意する。

思ったことをやろうとしても、そのときだけで終わる場合が多い。

いろんな条件が重なり状況変化が生まれるからだ。

それらを克服して絶対にやり遂げるとの決意は、そのことの成就の喜びを、脳に刻み込む本気の臨場感の強さが大事となる。

また「勝ちに不思議な勝ちあり、負けに不思議な負けなし」と先哲は言う。

臨場感を持って物事にあたれば勝敗の因が見える。

だが何があっても大切なことは、「勝負に負けても 人生に負けない」ことである。



矜持という心

今週のビタミン

投稿日：2010年6月17日

矜持とは、プライドである。

人が自ら、「このことは自分が持ち続けている、優れたこと」と自覚していることである。

このことで、アメリカ大統領「リンカーン」の有名な言葉がある。

リンカーンが、自らの靴を磨いていた時、執事が「大統領ともあるものだが、そんな卑しい靴磨きなどしてはー」とこがめた時リンカーンは、

「いや、世の中に卑しい職業などない、卑しい人間がいるだけだ」と答えたと言う。

卑しさは、世間の法理を掻い潜つてでも、立場等を利用したりしてやることである。

せめて、国をはじめ、あらゆる組織の長は、この卑しさの無い模範を示すべきである。

これこそが、本来、持つべきところの「優れた人間としての持つべき矜持」なのだ。

時がどうあろうと社会は人がつくってきたもの、今の思いをあきらめないで希求し、加勢することこそ大切ではないでしょうか。

本センターは、人権という人として最も大切な価値をさらに発揮できるよう啓発してまいります。（編集者：川手靖猛）

後援企画

（チャリティー）
★バイマヤンジン
トーク&コンサート

・3/19(土)
可児市文化創造
センター
入場料 1,000円
全自由席
（主催：国際ソロプチ
ミスト可児）

平成23年度主事業(予定)

- ①学校「人権本」巡回制度
（ボックス・フロー）（6月～）
- ②標語・300字小説の募集
（7月～）
- ③ぬくもり講演会
12月4日(日)
- ④他
（人権相談・ホームページ啓発等）

編集後記（啓発のひかり）

新しい年が始まりました。今年の一年先を、ふと想い馳せられます。

光線が一点に絞られるように、混沌とした閉塞感が必然と収束してくればと思います。

混迷が深ければ深いほど、閉塞が大きく、苦しければ苦しいほど、変化を望む熱量は大きくなります。

時がどうあろうと社会は人がつくってきたもの、今の思いをあきらめないで希求し、加勢することこそ大切ではないでしょうか。

本センターは、人権という人として最も大切な価値をさらに発揮できるよう啓発してまいります。（編集者：川手靖猛）